新聞　（第三種郵便物認可）　第44569号

飛鳥時代 のぼり旗支えた――

じじばば石

高畠・安久津八幡神社

幢竿支柱か

東海大山形高 清野教諭が推論

高畠町の安久津八幡神社に「じじばば石」と呼ばれる2本の古い石柱がある。「老夫婦が鳥居を建てようと引っ張ってきて、途中で折れた」などの伝説が残る謎の巨石。東海大山形高教諭の清野春樹さん(60)＝米沢市＝はこの石柱が、1300年余り前の飛鳥時代、東北開発の最前線で仏教の権威を示すため掲げた幢幡(どうばん＝のぼり旗)を支える「幢竿(どうかん)支柱Q」ではーと推論した。石の幢竿支柱だとすれば国内初の例。12日午後1時半、上山市体育文化センターで開かれる県地域史研究協議会で発表する。

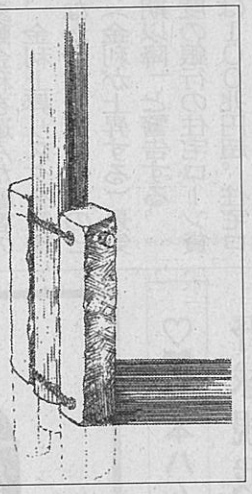
「じじばば石」を幢竿支柱と推論した清野春樹さん。手前がじじ石、奥がばば石＝高畠町の安久津八幡神社

神社の参道脇にある石柱のうち、西側のじじ石は長さ5・4㍍、東のばば石は5・1㍍。1787（天明7）年に訪れた江戸時代の地理学者古川古松軒は「社前に柱が2本倒れている。とても古く、大木の化石にも見える」と記しており、今と変わらない状態だった。

清野さんが「じじばば石」を幢竿支柱と考えたのは、朝鮮半島では三国時代の支柱が、寺や廃寺跡に今も立っているから。支柱で安定させた高い柱に幢幡を掲げる風習は中国、朝鮮半島を経て日本に伝わった。国内では藤原宮跡や大寺院跡に、幢竿支柱遺構がある。これまで見つかったのは木製支柱だが、凝灰岩の産地高畠では、中国、朝鮮半島と同様、石の支柱があってもおかしくないと推理した。

もう一つ注目したのは「日本書紀」の記述。689(持統3)年、優嵯曇（うきたむ＝置賜）の有力者の子息が出家を願ったーとある。同書には同年、蝦夷（えみし）の僧に天皇が幡を与えたとも記されている。

当時置賜の郡衙（ぐんが＝郡役所）があったのは高畠。これらの手掛かりから清野さんは、安久津八幡神社周辺はそのころ郡衙付属の寺院で、下賜されたのぼり旗を幢竿に高く掛けていたのではーと推測する。「石柱の長さからみて、幢竿は数十㍍あったのでは。高畠という地名も『高い幡（はた）』に由来するかもしれない」と話している。



じじばば石を幢竿支柱とした想像図。中央が幢幡を掲げた幢竿、右がばば石、左がじじ石　（鈴木敏嗣さん作画）

Q 幢竿支柱　幢幡（のぼり旗）を掲げる木の幢竿を下側で支える支柱。2本の支柱が幢竿を両側から挟み、貫（ぬき）や縄を穴に通して幢竿を固定する。「じじばば石」の場合、ばば石だけ3カ所穴が開いており、図のような固定方法が考えられるという。仏教の厳かさを知らせるため、高い幢竿の先にのぼり旗を下げた。